馬高・三十稲場遺跡

— 史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査概報Ⅱ —

2007

長岡市教育委員会

例　言

1．本報告書は、新潟県長岡市の馬高・三十稲場遺跡環境整備事業に伴う発掘調査（平成15・16年度）の概要をまとめたものである。
2．発掘調査の対象は、史跡馬高・三十稲場遺跡（長岡市関原町１丁目字中原・遠藤）のうち、馬高遺跡（中原2995番２他）の部分及び遠藤沢の部分である。
3．発掘調査は両年度ともに新潟県の緊急地域雇用創出特別基金事業補助金を受け、発掘調査支援業務を㈱大石組（長岡市南町）に委託して実施した。調査期間及び調査体制は以下のとおりである。

＜平成15年度＞
調査期間：平成15年５月27日～11月17日
整理期間：平成15年９月16日～３月15日
調査主体：長岡市教育委員会（教育長：笠輪 春彦）
調査総括：駒形 敏朗（科学博物館副主幹）
調査担当：小熊 博史（科学博物館主査）
調 査 員：鳥居 美栄（科学博物館学芸員）
事 務 局：科学博物館（館長：野口 正巳）

＜平成16年度＞
調査期間：平成16年７月20日～10月15日
整理期間：平成16年５月24日～３月18日
調査主体：長岡市教育委員会（教育長：笠輪 春彦）
調査総括：駒形 敏朗（科学博物館副主幹）
調査担当：小熊 博史（科学博物館主査）
調 査 員：鳥居 美栄（科学博物館主任）
事 務 局：科学博物館（館長：山屋 茂人）

4．発掘調査の出土遺物・調査記録は長岡市立科学博物館（埋蔵文化財宮内整理作業所）で一括して保管している。遺物の注記は、「(年度03または04) UD－（取上番号）（出土区）（遺構・層位）」とした。
5．本報告書の執筆・編集は小熊博史が担当した。
6．発掘調査及び整理作業にあたり、文化庁、新潟県教育委員会、馬高・三十稲場遺跡保存会をはじめ多くの機関・研究者・市民の方々から御指導や御協力をいただいた。厚くお礼申し上げる。

目　次

Ⅰ　遺跡の概要、環境整備事業及び発掘調査の経緯 …… 1
Ⅱ　平成15年度の発掘調査 …… 2
　（1）調査の概要　（2）確認された遺構　（3）出土した遺物
Ⅲ　平成16年度の発掘調査 …… 11
　（1）調査の概要　（2）確認された遺構　（3）出土した遺物
Ⅳ　ま　と　め …… 16

図版目次

図１．馬高・三十稲場遺跡の位置及び発掘調査区 …… 1
図２．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（1） …… 4
図３．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（2） …… 5
図４．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（3） …… 6
図５．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（4） …… 7
図６．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（5） …… 8
図７．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（1）〔南区〕 …… 9
図８．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（2）〔中央北区〕 …… 9
図９．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（3）〔東西Ⅲ東〕 …… 10
図10．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（4）〔中央南区〕 …… 10
図11．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（1） …… 12
図12．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（2） …… 13
図13．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（3） …… 14
図14．平成16年度 馬高遺跡の遺構平面図（1）〔東西Ⅸ〕 …… 15
図15．平成16年度 馬高遺跡の遺構平面図（2）〔北区・東西Ⅷ東〕 …… 15
図16．平成12・15・16年度 馬高遺跡の遺構平面全体図 …… 17

（表紙写真：平成16年度 馬高遺跡の発掘区〔北区・東西Ⅷ東〕、裏表紙：報告書抄録）

Ⅰ　遺跡の概要、環境整備事業及び発掘調査の経緯

馬高・三十稲場遺跡（長岡市関原町１丁目字中原・遠藤）は、信濃川左岸の段丘面（関原面）上に立地する縄文時代の大規模な集落跡である（図１）。「遠藤沢」と呼ばれる小規模な沢を挟んで、東側に中期の馬高遺跡、西側に後期の三十稲場遺跡が位置する。標高は約60～65m。特に馬高遺跡は「火焔土器」発祥の地として全国的に著名であり、昭和54年２月21日に隣接する三十稲場遺跡とともに国の史跡に指定された。その指定面積は45,704.54㎡である。また、馬高遺跡出土の「火焔土器」は平成２年に重要文化財となり、平成14年には、その他の主要な土器・土製品・石器類を含む「馬高遺跡出土品」として追加指定を受けた。

長岡市教育委員会（主管：科学博物館）では、史跡指定後、保存整備に向けた事業を推進してきた。平成９年度に指定地の公有化を完了。11年度から学識経験者と市民代表からなる馬高・三十稲場遺跡保存整備専門委員会を設置、13年度に環境整備事業基本計画を策定。14年度からは同保存整備専門委員会を設置、同年に環境整備事業基本設計を策定した。15年度以降は、保存整備専門委員会で実施設計等の検討を進めている。18年度には、史跡等・登録記念物保存修理事業の補助を受けて、環境整備工事の実施設計を行い、馬高遺跡部分の準備工事（既存構造物や樹木の撤去・伐採）及び造成工事（保護盛土）に着手した。

史跡整備の基礎資料を得るための発掘調査については、平成11年度に馬高遺跡の確認調査（小熊2000）、12年度には馬高遺跡の発掘調査及び三十稲場遺跡の確認調査（小熊2001、小熊編2002）を行っている。これらの調査によって、馬高遺跡には時期の異なる大小二つの集落があり、遺構群が馬蹄形状に広がる様相が推定されたが、さらに集落の構造や遺構の委細を明らかにするため、平成15・16年度にも発掘調査を実施することにした。

① 馬高・三十稲場遺跡の位置（1/50,000）

② 馬高遺跡の発掘調査区（1/2,000）

図１．馬高・三十稲場遺跡の位置及び発掘調査区

Ⅱ　平成15年度の発掘調査

1．調査の概要

＜調査区＞　史跡整備に向けた基礎資料を得るための発掘調査であり、集落の構造と遺構の特徴を把握すること目的として馬高遺跡の各地点に発掘区を設定した（図１）。遺跡の中央付近では、遺構の検出と精査を行うため、比較的広い範囲を設定した。平成12年度調査の中央区に接続する「中央北区」・「中央南区」、南部の「南区」、北部の「北区」である（計1,330㎡）。また、遺跡全体を縦断・横断する幅４ｍのトレンチ（東西方向：「東西Ⅱ～Ⅷ」、南北方向：「南北Ⅲ～Ⅴ」の各ライン）を適宜設定して、土層の堆積状況や遺構の有無を確認した（計1,620㎡）。さらに遺跡南西の遠藤沢部分については、堆積環境や集落本体との関連を明らかにするため、トレンチを設定して遺物包含層の有無等を調査することにした（計64㎡）。

＜経過＞　５月28日から発掘作業を開始。遺跡の南部については、８月下旬に発掘を終了し、埋め戻しを行った。その後、遺跡の中央～北側の発掘を継続し、主要な住居跡や土坑などの遺構内部の発掘を実施した。天候不順もあって調査が停滞し、当初の目標をやや縮小せざるをえない状況になった。そのため、北区については包含層の発掘（遺構確認）にとどめ、遺構内部の発掘は次年度に持ち越すことにした。調査は11月17日に終了、発掘面積は総計2,970㎡であった。

なお、８月10日と９月27日に市民向けの発掘調査見学会を実施した（図５②）。第１回目132人、第２回目151人の参加者が訪れた。

＜整理作業＞　整理作業は発掘調査と併行して９月後半から開始、３月まで実施した。遺物の水洗を終了した後、注記・分類・集計・復元の各作業を進めた。自然科学分析については、黒曜石製遺物の原材産地同定分析、炭化種子・炭化材の樹種同定分析、埋設土器内土壌のリン・カルシウム分析、放射性炭素（AMS）年代測定等を専門業者及び機関に依頼した。

＜層序＞　最も堆積状況が良好な遺跡中央部における基本層序は次のとおりである。Ⅰ層：現表土、黒褐色土、層厚約20㎝。Ⅱ1層：褐色土、下部で遺物を多量に包含、層厚約15～20㎝。Ⅱ2層：黒褐色土、遺物を少量包含、層厚約15～20㎝。Ⅲ層：褐色～黄褐色土、漸移層、層厚約５～10㎝。Ⅳ1層：黄色褐色土、風性ローム層、地山。遺物の出土状況から、Ⅲ層上部付近が遺跡の旧表土部分に相当するとみられる。なお、遺跡の南部及び北部の大半は残存状況が不良であり、過去の畑作によって遺物包含層が削平されている部分が多い。

2．確認された遺構（図２～10）

設定した発掘区・トレンチごとに遺構や遺物の出土状況等の概要を記載する。

（１）遺跡南部：集落２（図２①）

＜東西Ⅱトレンチ＞　12年度の南北Ⅰラインに直交する形で設置。VB～ⅥB区で土坑複数基を確認。円形の浅い土坑が多く、そのうちの１基は典型的なフラスコ状土坑で、内部に中期終末の土器が多量に廃棄されていた（図２②）。

＜東西Ⅲ西・南北Ⅲトレンチ＞　遺跡の南西部に設置。ⅢC～Ｅ区で炉跡４基を確認（図２③）。小規模な複式炉や埋甕炉である。またⅢD・Ｅ～ⅣD区で土坑複数基を検出。いずれも貯蔵穴とみられる円形の浅い土坑である。

＜東西Ⅳトレンチ＞　12年度の南北Ⅰラインに直交する形で設置。VC区西側で土坑５基を確認（図２⑤）、覆土の状況から墓坑と考えられる。VC区東側～ⅥC区では埋甕炉３基を検出した（図２④）。ⅦC区側は遺構がほとんど認められない。

＜南北Ⅳ・Ⅴトレンチ＞　東西Ⅳトレンチに直交して接続。ⅣトレンチではⅦD区で焼礫を充填した集石土坑１基を検出したほか、遺構は希薄であった。ⅤトレンチのⅥD区北側では土坑及び掘立柱柱穴を確認した。掘立柱柱穴は南区に続く。

＜南区＞（図７）　11年度の11トレンチの周辺に設定し、多数の掘立柱柱穴及び土坑複数基、集石遺構１基、埋設土器３基を確認。VE区で重複した掘立柱建物跡２棟、ⅥE区でさらにもう１棟を推定した（図３③④）。いずれも梁間１間×桁行３間（約3.5×7.5ｍ）で長軸中央に棟持柱をもつ。掘立柱柱穴の一部には長楕円形の浅い土坑が築かれていた（図３②）。その覆土から一括土器や硬玉製大珠が出土していることから墓坑の可能性が高く、掘立柱建物の廃絶直後に墓域として機能していたことも考えられる。

（２）遺跡中央部～北部：集落１（図４①）

＜東西Ⅲ東トレンチ＞（図９）　遺跡の南東部に設置。ⅧD・Ｅ区境界で平面円形の竪穴住居跡１基（ⅧE－H1）を確認（図３⑤～⑧）。直径約５ｍの覆土相当部分に多量の遺物が廃棄され、中期前葉と中葉の土器が混在していた。床面中央に長方形の石組炉があり、部分的に周溝を検出した（図４②③）。主柱穴は８本とみられる。その周辺には地床炉をもつ別の住居跡が重複しており、形態を捉えにくい状況にあった。その他、トレンチ東端側で遺構は希薄になるが、埋設土器３基が確認されている。

＜東西Ⅴ東・西トレンチ＞　12年度の南北Ⅱラインに直交する形で設置。西端で中央南区と接続する。東トレンチのⅦE区で竪穴住居跡１基（ⅦE－H1）を確認（図４④⑤）。覆土相当部分（直径約４ｍ）に多量の遺物が廃棄されていた。周溝は確認できなかったが、中央部に石組炉を

もつ円形の住居と考えられる。その東側には長大な地床炉が認められ、長方形住居が重複している可能性が高い。西トレンチでは遺構は確認されなかった。

＜中央南区＞（図10）　12年度の中央区の南西側に接続して設置。ⅦF区で長大な地床炉をもつ長方形住居３棟を確認した（図５③）。そのうち、周溝が巡り全形がほぼ明らかな住居跡（ⅦF－H2・H3）は、長軸約８ｍ×短軸約３ｍの規模をもつ。床面南西側の地床炉には、「こ」の字状の炉石が組み合わされていた。主柱は８本とみられる。また、ⅦF区の南西隅には崩れた石組炉１基があり、周溝は確認できないが、円形住居と考えられる。これらの住居群の上部には多量の遺物が廃棄されていた（図５①）。その他、先のⅦF－H2住居跡の東側で、フラスコ状土坑１基（図５④）が発見されている。

＜中央北区＞（図８）　12年度の中央区の北東側に接続して設置。２棟の長方形住居を確認した（図５⑤⑥）。その他、地床炉をもつ楕円形住居の一部や、複数基の地床炉もあった。ⅦG区で部分検出の住居跡は、12年度の第８号住居に接続する。ⅦH区の住居跡（ⅦH－H2・３）は、長軸約８ｍ×短軸約3.5ｍの規模が推測される。床面には長大な地床炉が広がり、中央付近には「こ」の字状の石組をもつ。床面や地床炉は貼り床の手法等によって数枚が重なっており、住居の建替えが複数回行われたことを示す。なお、この長方形住居の隅にある円形の浅い土坑には、底部を故意に破損したとみられる火焔型土器を逆位に埋設する特異な事例がみられた（図５⑦）。

住居群の東側（内側）には、多数の土坑群が確認された。平面円形～楕円形の小形土坑が多い。貯蔵穴としては、典型的なフラスコ状土坑（図５⑧）２基と、底部の張り出しの弱い小形フラスコ状土坑が複数基あった。また。平面楕円形の浅い土坑（図６①）も複数基あり、墓坑の可能性が考えられる。

＜北区＞　遺跡北部のⅦI区（20×20ｍ）に設置。北半域で石組炉１基と複数の地床炉を確認した。石組炉は黒色土中の検出で半壊していた。地床炉をもつ住居跡は一部に周溝がみられ、楕円形（小判形）の平面形が推測された（図６②）。また北東側で検出されている住居跡は長方形住居の可能性が高い。遺物の出土は住居跡（炉跡）の上部及び周辺域に集中していた。包含層を発掘して終了。次項（平成16年度）参照。

＜東西Ⅵトレンチ＞　遺跡の北東部に設置。トレンチ東端付近で遺物が密集して発見された（図６③～⑤）。完形に近い個体も複数あり、従来の予想のとおり遺物廃棄場（土器捨て場）と考えられる。地形的には東側に向かって緩く傾斜する付近にあたる。その他の部分には遺構はほとんど認められなかった。

＜東西Ⅶトレンチ＞　東西Ⅵトレンチの北側に設置。トレンチ東端側で遺物がややまとまって出土した。東西Ⅵトレンチの遺物廃棄場に続く広がりとみられる。遺構はほとんど認められない。

＜東西Ⅷ東トレンチ＞　北区からの住居群の広がりを確認するために設置したが、地床炉１基を確認したにとどまっている。その他に土坑や柱穴とみられる遺構が若干ある。次項（平成16年度）参照。

＜東西Ⅷ西トレンチ＞　北区に接続する部分で竪穴住居１棟が確認された。竪穴住居は平面楕円形状で東側には周壁が残り、床面の中央部には地床炉が築かれていた。また、覆土には多量の遺物（中期前葉）が廃棄されていた（図６⑥）。その西側は傾斜が急になり、遺構は途切れている。次項（平成16年度）参照。

（３）遠藤沢

史跡指定地外の地点も含めて、Ⅰ～Ⅴトレンチの５か所を設定して試掘した（Ⅳ・Ⅴが指定地内）。そのうち、Ⅴトレンチを除く４か所で遺物の出土を確認した。各トレンチ20～50点程度の土器片と少量の剥片があり、地面下約0.8～1.4ｍ付近で褐色～青灰褐色を帯びた砂礫層（部分的に木片等の有機質分を含む）に混在していた（図６⑦）。出土土器の大半は、三十稲場式～南三十稲場式段階とみられる。いずれも砂礫層中からの出土であり、上流側（三十稲場遺跡側）から流れ込んで堆積した可能性が高い。その層以下は黄褐色の砂礫層が続く（地表面から2.5ｍの深度まで確認）。

３．出土した遺物

縄文土器の総数はコンテナで237箱に上り、中期全般にわたる土器が多数出土した。遺跡北部～中央部は火焔型土器や王冠型土器を含む中期前葉～中葉（東北地方の大木7ｂ～8ｂ式段階）、遺跡南部では中期後葉の土器（大木９～10式段階）が主体的である。その破片総数は約120,000点（約1,700㎏）に及ぶ。特に遺物が密集して出土したのは、土器廃棄場とみられる東西Ⅵトレンチであり、次いで中央南区や東西Ⅲ東トレンチなど住居群が検出された地点にまとまっていた。

土製品・石器類（礫片を含む）はコンテナ108箱を数える。土製品は土偶（24）、三角形土版（60）、土製耳飾（21）などが出土した。特に三角形土版の出土が顕著である。また、石器類には、石鏃（33）、石槍（８）、石錐（２）、石匙（４）、掻器（２）、打製石斧（166）、磨製石斧（101、小形品を含む）、砥石（130）、石皿・磨石類（1,827）、石棒（18）などの器種があり、磨石類以外では石鏃や石斧類の組成率が高い。その他、少量ではあるが、コナラやクリ・クルミなどの炭化種子も発見されている。

① 馬高遺跡南半域の発掘区全景（東西ⅡT、東西ⅣT、南北ⅢT、南北ⅣT、南区ほか）

② フラスコ状土坑の遺物出土状況（東西ⅡT、VB−FP1）

③ 炉跡検出状況（南北ⅢT、ⅢC−9f区）

④ 炉跡半截状況（東西ⅣT、ⅥC−H1）

⑤ 土坑群完掘状況（東西ⅣT、VD区）

図２．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（1）

① 発掘作業（南区、南東側から）

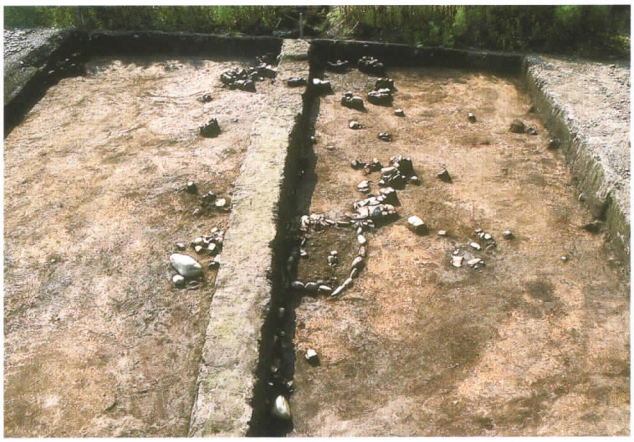
② 土坑上面の土器出土状況（南北VT、ⅣE－P3）

③ 掘立柱建物完掘状況全景（南区、南東側から）

④ 掘立柱建物完掘状況（南区、VE－1b号建物）

⑤ 住居跡周辺の遺物出土状況（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1）

⑥ 住居跡覆土の遺物出土状況（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1）



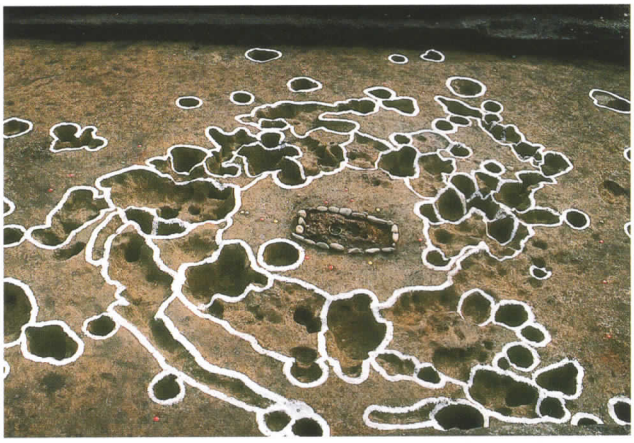
⑦ 住居跡及び炉跡検出状況（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1）

⑧ 発掘作業（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1、北側から）

図３．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（2）

① 馬高遺跡北半域の発掘区全景（東西Ⅲ東T、中央北区、中央南区、北区、東西ⅥTほか）

② 石組炉検出状況（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1）



③ 住居跡完掘状況（東西Ⅲ東T、ⅧE－H1、北側から）

④ 炉跡及び遺物出土状況（東西VT、ⅦE－H1）

⑤ 石組炉検出状況（東西VT、ⅦE－H1）

図４．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（3）

① 遺物出土状況（中央南区、Ⅵ･ⅦF区付近）

② 発掘調査見学会（中央南区）

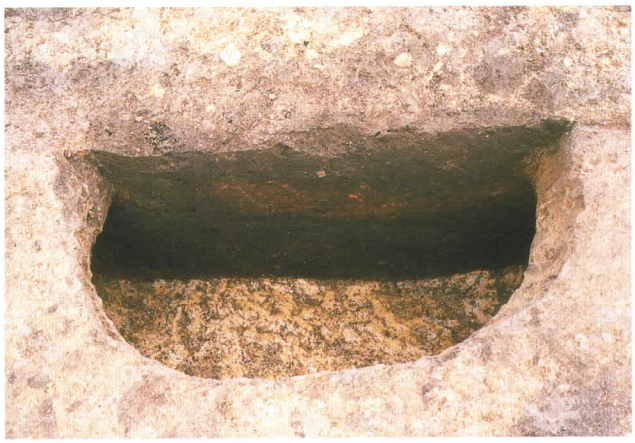
③ 住居跡完掘状況（中央南区、ⅦF－H2･3）

④ フラスコ状土坑半截状況（中央南区、ⅦF－FP12）

⑤ 遺物出土状況（中央北区、Ⅵ･ⅦH区、西側から）

⑥ 遺構完掘状況（中央北区、Ⅵ･ⅦH区、西側から）

⑦ 火焔型土器の出土状況（中央北区、ⅦH－H3－P74）



⑧ フラスコ状土坑半截状況（中央北区、ⅦH－FP45）

図５．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（4）

① 石棒の出土状況（中央北区、ⅧH－P105）

② 住居跡検出状況（北区、ⅧI－H2）

③ 遺物出土状況（東西ⅥT、東側から）

④ 関原小学校との連携による発掘体験教室（東西ⅥT）

⑤ 火焔型土器等出土状況（東西ⅥT）

⑥ 住居跡覆土の遺物出土状況（東西Ⅷ西T、ⅦI－H1）

⑦ 遠藤沢IT発掘状況（南側断面）

図６．平成15年度 馬高遺跡の発掘調査（5）

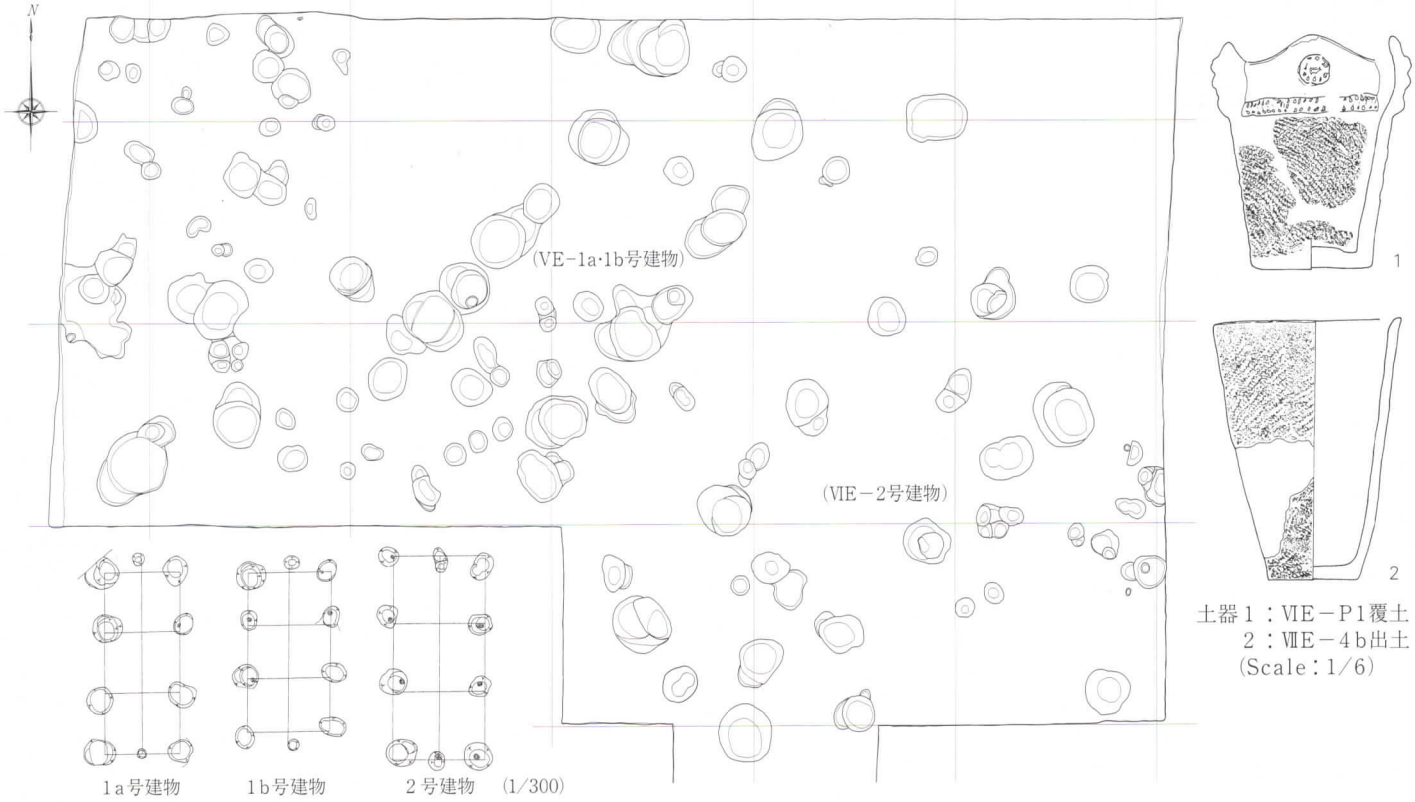


図7．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（1）〔南区〕(1/150)

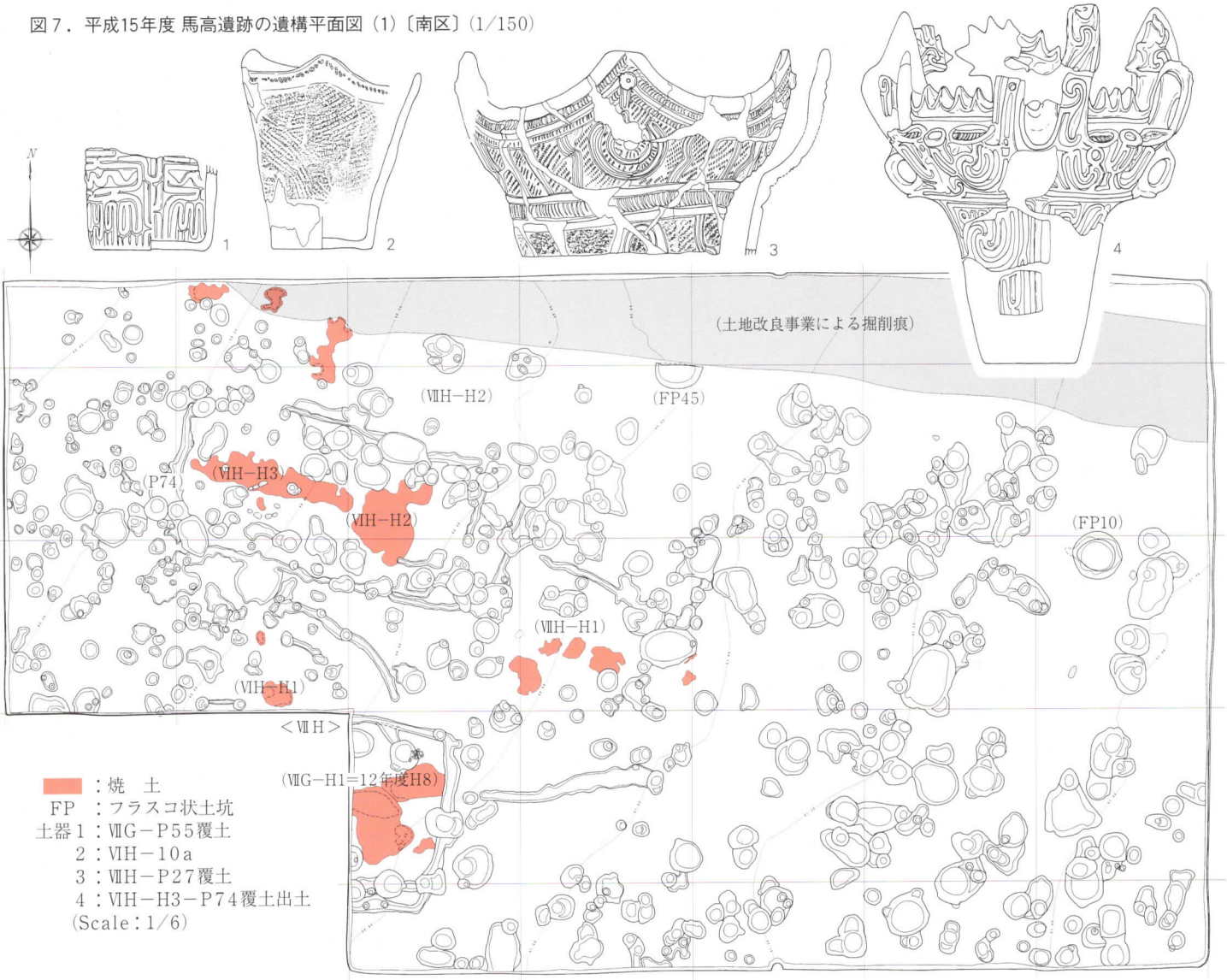


図8．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（2）〔中央北区〕(1/150)

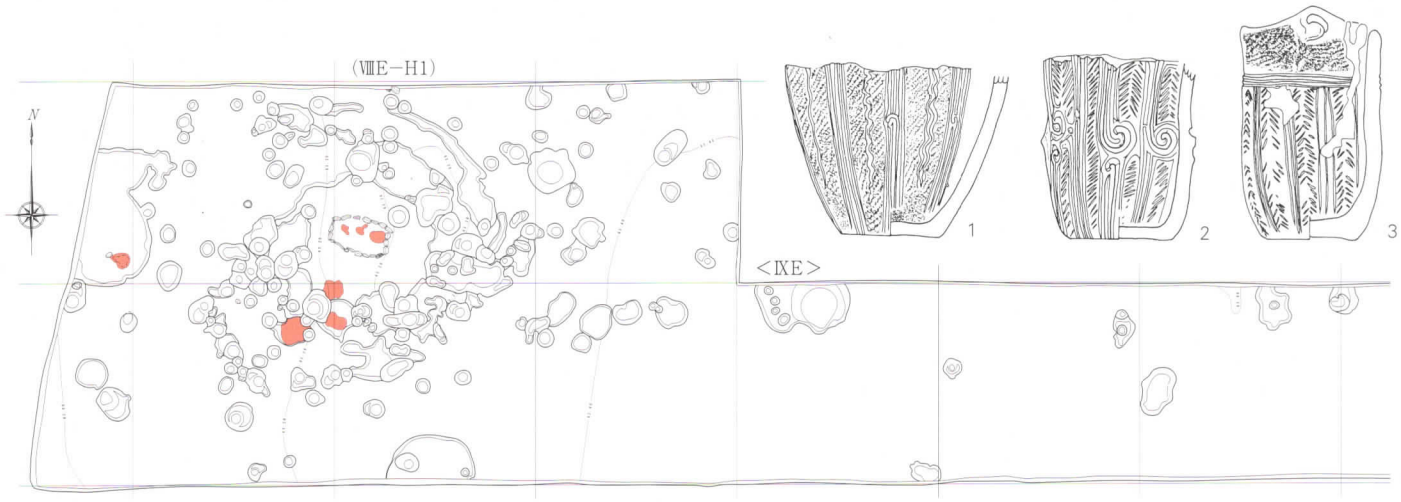


図９．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（3）〔東西Ⅲ東〕（1/150）
土器１：ⅧE－H1－炉内土器、２：ⅧE－６a、３：ⅧE－６b＝H1覆土（Scale：1/6）

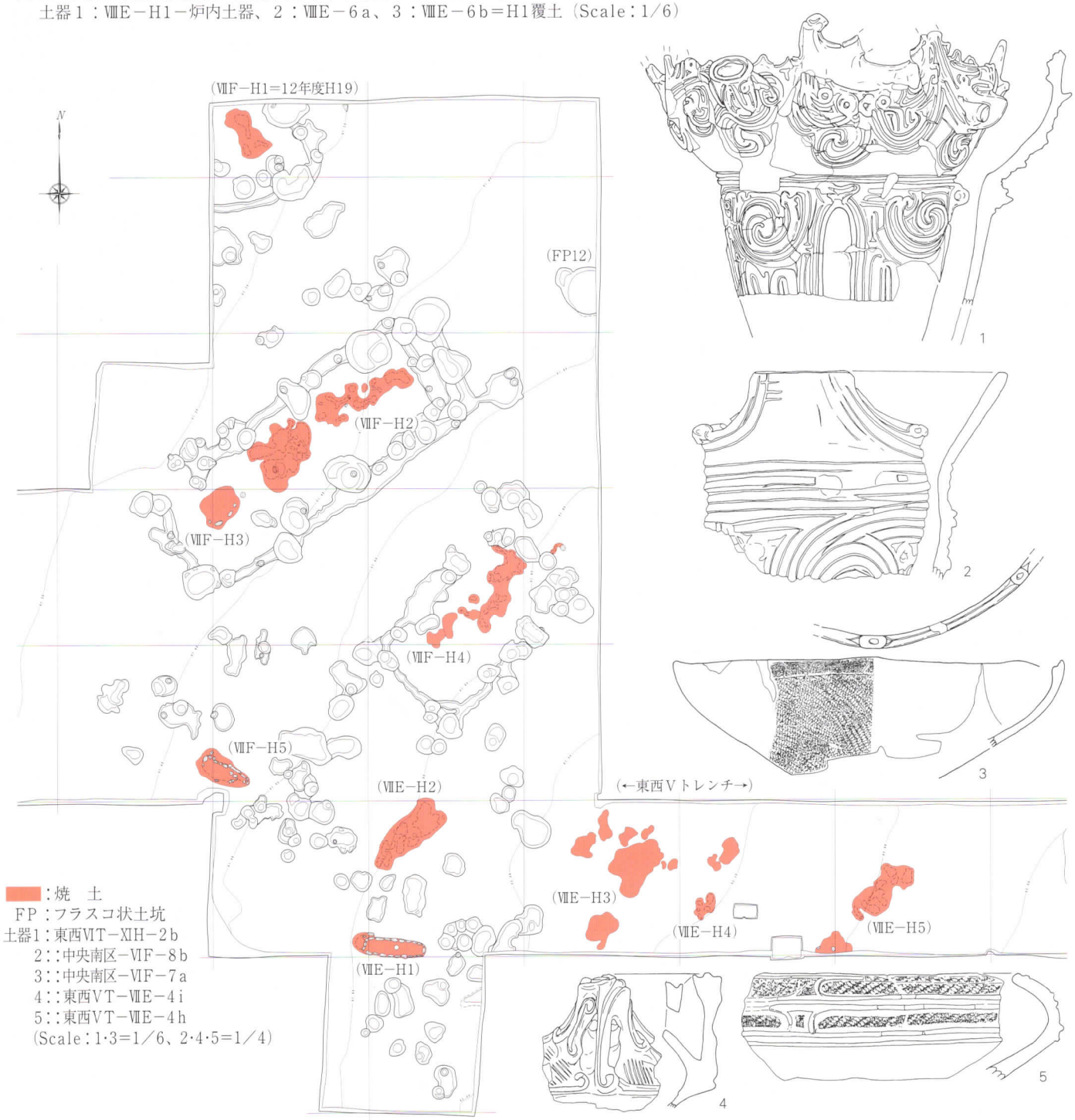


図10．平成15年度 馬高遺跡の遺構平面図（4）〔中央南区〕（1/150）

Ⅲ　平成16年度の発掘調査

1．調査の概要

平成15年度の補充的な調査で、主に遺跡北部（集落１の北部）と遠藤沢の一部を対象とした（図１）。平成16年７月20日から発掘作業を開始。遺跡北西部の遠藤沢寄りに東西Ⅷ西トレンチと東西Ⅹトレンチ、遺跡中央部付近に東西Ⅸトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した（計336㎡）。また、15年度の発掘調査（遺構確認のみ）で住居群等を確認していた北区と東西Ⅷ東トレンチについては、再び埋土を除去するとともに北区の東側に拡張して接続、住居跡・土坑・ピット等の遺構内部の発掘を進めた（計616㎡）。さらに遺跡北東部には南北Ⅵトレンチを設定し、遺物廃棄域の広がりを確認した。９月18日には市民向けの発掘調査見学会を開催、10月15日に調査を完了した。

なお、整理作業は15年度からの継続で５月下旬から開始、発掘調査と併行して３月まで、遺構図面の整理や遺物の水洗・注記・分類・集計・復元・図化等の各作業を実施した。

2．確認された遺構

（1）遺跡北部：集落１（図11～15、表紙写真）

＜東西Ⅷ西トレンチ＞（図12①）　15年度のトレンチに連続する形で遠藤沢側に設置。トレンチ東側で北西に延びる小規模な沢状地形を確認した（図11①）。その西側は平坦な地形が続き、トレンチ西端部付近で急激に遠藤沢に落ち込むものとみられる。遺物はトレンチ東端（小規模な沢の上部）でややまとまって出土したのみで、その他はほとんど認められなかった。遺構もまったく検出されていない。

＜東西Ⅹトレンチ＞（図14）　12年度の南北Ⅰトレンチに直交する形で遠藤沢側に設置。遺存状況は不良で堆積は薄く、表土のみで包含層は認められなかった。地山面は緩く遠藤沢に傾く。遺物はほとんど出土しておらず、遺構も検出されなかった。

＜東西Ⅸトレンチ＞　15年度の中央北区の東側に接続する形で設置。遺存状況は不良で堆積は薄く、表土のみで包含層は認められなかった。トレンチ中央部北側には土地改良の際の掘削痕が残る。遺物はほとんど出土しなかったが、トレンチ西側で土坑とピット複数基を確認した（図11②）。土坑の一部は長楕円形を呈し、覆土の状況から墓坑の可能性がある。遺構内部を発掘したが、ごく少量の土器破片が出土したのみであった。

＜北区及び拡張区・東西Ⅷ東トレンチ＞（図15、表紙写真）15年度に遺物包含層のみ発掘した北区については、東側に10×10ｍの範囲を、さらに15年度の東西Ⅷ東トレンチを北側に４ｍ拡張して各区を接続することにした。その結果、複数の住居跡（炉跡）と、多数の土坑・ピットを確認した（図12①～③）。集落１の環状帯の北側部分にあたり、住居跡（炉跡）は発掘区の南西側から北東側に広がりをみせる。北区の中央部付近には楕円形住居が重複して検出された。部分的に周溝を残すものが４棟程度あり、比較的遺存状態がよいもの（ⅧI－H2B）は長軸約5.4ｍ・短軸約3.7ｍの規模が推測される。炉跡はいずれも地床炉で、床面は黄褐色の地山ブロックを叩きしめた貼床である（図11③、12④）。

一方、北区の北東部から東西Ⅷ東トレンチ西部には、長方形住居が放射状に確認されている。４棟程度が認められ、北区北東部の住居跡（ⅧI－H6、図12⑤）は長軸約８ｍ×短軸約３～４ｍの規模が推測される。床面には長大な地床炉が広がり、東西Ⅷ東トレンチの住居（ⅧJ－H1、図13③）は遺存状況が比較的良好で、長軸８ｍ以上×短軸約4.5ｍの規模を示す。周溝が二重に巡り、中央部付近には「こ」の字形の石組炉が検出された。住居の床面や主柱の覆土からは火焔型土器の大形破片が出土している（図13②④）。その他、住居の形態が定かでない複数基の地床炉やピットがみられた。

遺物の出土は住居跡周辺に集中する傾向が指摘される。またピットからまとまって出土する例（図11④）も比較的目立つ。本地点から出土した土器の様相から、住居の構築時期は中期前葉～中葉（東北地方の大木7b～8a式段階）に位置づけられる。さらに住居群の東側（環状の内帯側）には、複数の土坑が確認された（一部は住居跡と重複）。フラスコ状土坑（図11⑤⑥）７基のほか、墓坑とみられる浅い土坑が認められる。

＜南北Ⅵトレンチ＞　15年度に多量の遺物が出土した東西Ⅵトレンチ東側に直交する形で設置。包含層（Ⅱ層上部）から多量の遺物が出土した（図13⑤⑥）。部分的に焼土も検出されている。これまでの見解のとおり、遺物廃棄場に相当する地点と考えられる。

（2）遠藤沢

15年度に試掘したⅤトレンチ東側に、10×６ｍのⅥトレンチを設定（60㎡）。表土下約1.3ｍまで黒褐色土が堆積し、その下部には褐色～青灰褐色を帯びた砂礫層（20～30㎝）があり、流れ込みとみられる縄文時代後期の土器片が混在している。今回はさらに下部の礫層を掘り下げた（図13⑦⑧）。礫層の層厚は約2.5ｍで、その下部には黄褐色～赤褐色シルト質粘土層、青灰色シルト質粘土層が堆積していた（地表下約４ｍ付近）。青灰色シルト質粘土層の下部には、木片が多量に含まれていた。加工痕のある木片や土器などの遺物は認められないことから、流木等が自然堆積したものと推測される。

3．出土した遺物

縄文土器の総数はコンテナで約44箱を数え、北陸系の新崎式土器や火焔型・王冠型土器を含む中期前半の土器が確認された。その破片総数は約28,000点（約390kg）である。土器廃棄場とみられる南北Ⅵトレンチの包含層から多数出土しているほか、北区及び東西Ⅷ東トレンチの遺構に伴った土器も多い。

土製品・石器類（礫片を含む）はコンテナ約41箱。土製品は土偶（10）、三角形土版（24）、土製耳飾（7）、円板状土製品（3）など、石器類には石鏃（17）、石錐（1）、打製石斧（43）、磨製石斧（31、小形品を含む）、掻器（1）、砥石（35）、石皿・磨石類（637）などがある。その組成は15年度とほぼ同様の傾向を示している。また、石製品としては硬玉製大珠未製品（1）や石棒（4）が出土した。その他、少量の炭化種子も発見されている。

① 発掘作業（東西Ⅷ西T、東側から）

② 土坑群完掘状況（東西ⅨT、北側から）

③ 住居跡の地床炉及び床面検出状況（北区、Ⅷ－H2）

④ 土坑内部の土器出土状況（北区、Ⅷ－P28）

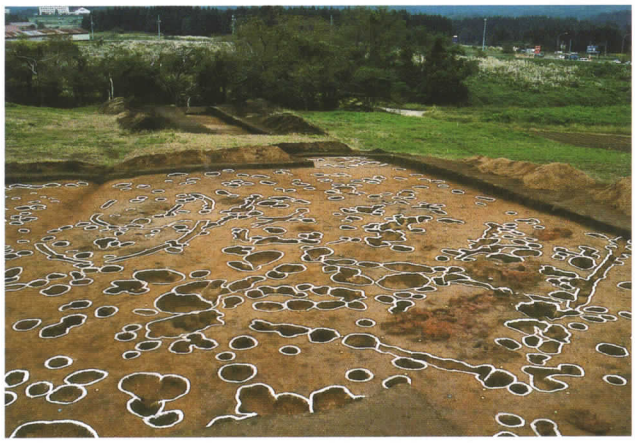
⑤ フラスコ状土坑半截及び遺物出土状況（北区、Ⅷ－FP4）

⑥ フラスコ状土坑半截状況（北区、Ⅷ－FP5）

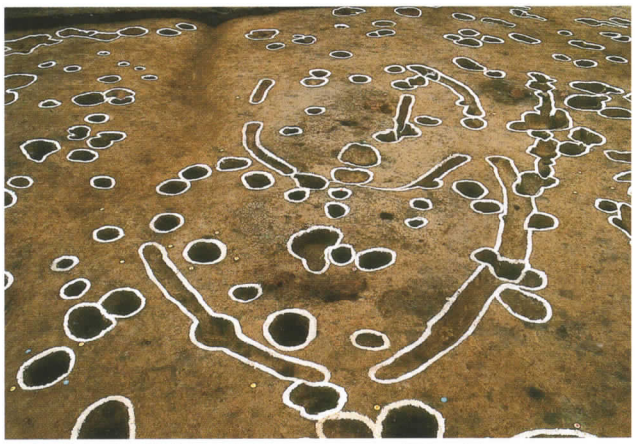
図11．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（1）

① 馬高遺跡北部の発掘区全景（北区、東西Ⅷ東Ｔ、東西Ⅷ西Ｔ、東西ⅨＴほか）

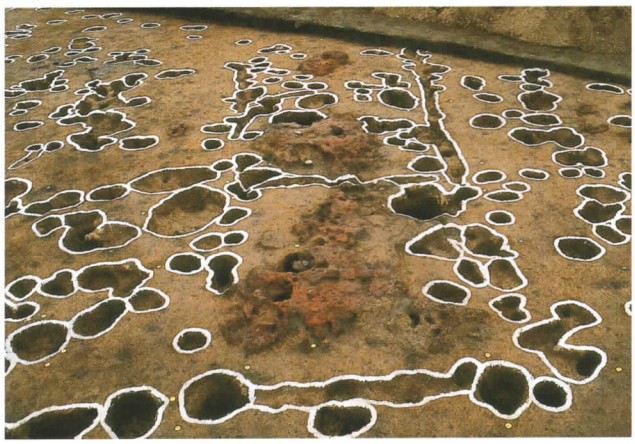
② 遺構完掘状況（北区、Ⅷ区南部、東側から）



③ 遺構完掘状況（北区、Ⅷ区南部、東側から）



④ 住居跡完掘状況（北区、Ⅷ－H2、東側から）



⑤ 住居跡完掘状況（北区、Ⅷ－H6、南東側から）

図12．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（2）

① 発掘作業（東西Ⅷ東T、南東側から）

② 火焔型土器出土状況（東西Ⅷ東T、ⅧJ－H1覆土）

③ 住居跡完掘状況（東西Ⅷ東T、ⅧJ－H1、南東側から）

④ 柱穴内部の土器出土状況（東西Ⅷ東T、ⅧJ－H2－P5）

⑤ 遺物出土状況（南北ⅦT、北側から）

⑥ 遺物出土状況（南北ⅦT、XG－9･10区付近）

⑦ 遠藤沢ⅦT発掘状況（北側断面）

⑧ 遠藤沢ⅦT発掘状況（最深部）

図13．平成16年度 馬高遺跡の発掘調査（3）

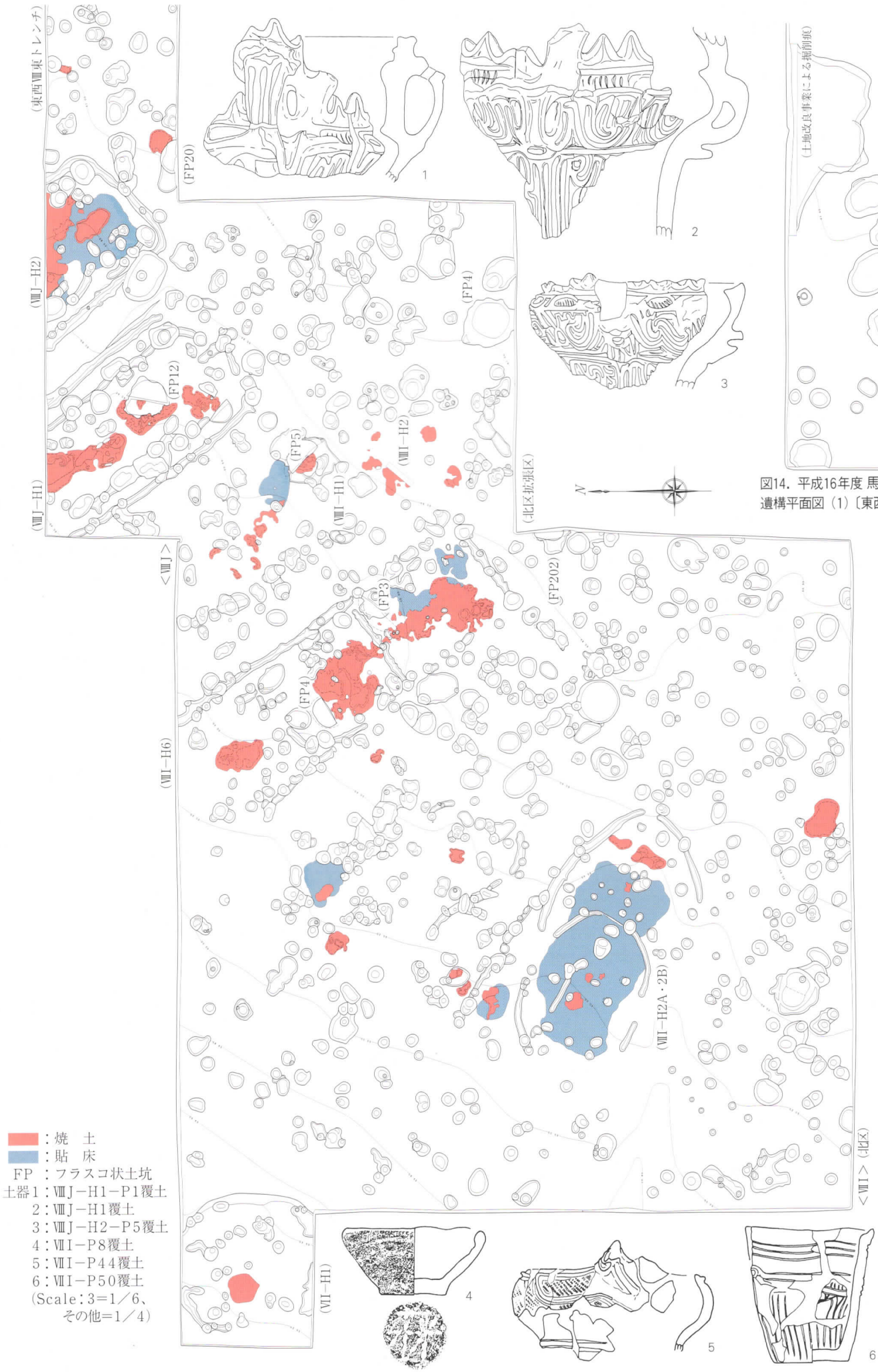


図14．平成16年度 馬高遺跡の遺構平面図（1）〔東西Ⅸ〕(1/150)

図15．平成16年度 馬高遺跡の遺構平面図（2）〔北区・東西Ⅷ東〕(1/150)

Ⅳ　まとめ

平成11・12年度に行われた発掘調査で、馬高遺跡には大小二つの集落が推測されており、平成15・16年度の調査結果もそれを裏づけている（図16）。遺跡中央部から北部にかけて大規模な馬蹄形（U字形）状、南部では小規模な馬蹄形状に広がっている様相が明らかになりつつあり、広場の周囲に住居群や貯蔵穴・墓坑などの施設を巡らす典型的な環状集落の姿が窺われる。出土土器の特徴から、中央部から北部の集落は中期前葉～中葉、南部の集落は中期後葉に位置づけられる。

南部の集落（集落２）は、竪穴住居・掘立柱建物跡・貯蔵穴・墓坑などから構成され、短期間に営まれた。竪穴住居跡（炉跡）は疎らではあるが、環状に展開すると考えられる。その周囲や内側には貯蔵穴とみられる土坑が分布する。良好な状況で確認された南区の掘立柱建物は、集落の北東部で広場の開口部付近に配置されており、一般的な竪穴住居とは異なる性格を帯びていたと考えられる。墓坑は住居跡内側の一部のエリア（VD区）にまとまりをみせるほか、掘立柱建物群と重複する浅い土坑や埋設土器がまとまっているエリア（VIE区）も墓域の可能性が高い。中期後葉（東北地方の大木10式段階）にほぼ限定される集落跡の事例は新潟県内では希少である。

中央部から北部の集落（集落１）は、竪穴住居・貯蔵穴・墓坑・遺物廃棄場などからなり、比較的長期にわたって存続した。竪穴住居群は長方形住居を主体として、卵形（倒卵形）を含む楕円形住居や円形住居が併存する。長方形住居はその長軸線が集落域の中心部（広場）を指向し、放射状で等間隔の配列が顕著である。それに対して、円形・楕円形住居の軸線は長方形住居に比較してややランダムで、その位置も規則的ではない。平成12年度の調査では不明瞭であった貯蔵穴や墓穴などの土坑群は、今回の調査で住居群の内側に広がっていることが確実となり、集落の基本的な構造はほぼ把握されたと思われる。竪穴住居群の内帯の直径は約100mに及ぶ。

これらの遺構群は、時期的には火炎土器様式が出現し終焉を迎えるころ（大木7b～8b式段階）にほぼ相当する。これまでの調査で、①地床炉の楕円形住居→②地床炉（一部に石組炉併用）の長方形住居→③石組炉の円形住居の３時期の変遷（小熊編2002）が明らかになっているが、今回の調査でもそれが追認された。特に15年度調査の中央北区の長方形住居（VIH－H2・3）や16年度調査の東西Ⅷ東トレンチ検出の長方形住居（ⅧJ－H1）などは、覆土やピット内から火焔型土器がまとまって出土しており、まさに最盛期の火焔型土器を製作していたころの住居に相当する。県内では、同時期の代表的な集落跡に堀之内町清水上遺跡、塩沢町五丁歩遺跡、津南町道尻手遺跡などがあり、集落の構成や住居の形態などに共通した特色が認められることから、信濃川流域の地域性を反映していると考えられる。

遠藤沢については、深掘りしたⅥトレンチの状況から、地表下約1.5m以下に厚く堆積した礫層は縄文時代後期初頭（三十稲場式段階）以前に形成されたとみられる。上流側から土石流のような大規模な礫の供給が生じた結果であろう。縄文時代中期に遠藤沢を利用した痕跡があったとしても、既に流されてしまった可能性が高い。今後、出土した木片の年代測定や土壌分析等を行い、遠藤沢が形成された状況を具体的に明らかにする必要がある。

なお、遠藤沢側の東西Ⅷ西トレンチや東西Ⅹトレンチの状況からは、沢沿いや住居帯の外側に土器捨て場などを形成した可能性は低い。おそらく集落１では、遺跡北東部及び廃絶した住居部分に廃棄したと考えられる。

長岡市では、史跡馬高・三十稲場遺跡を長岡の古代史を象徴する「火焔土器のふるさと」として保存整備することを目指している。特に馬高遺跡の部分では、発掘調査の成果に基づいて住居群や森林を復原し、縄文時代の佇まいが感じられる集落の姿を再現する。また、遺跡の南東部にはガイダンス施設（仮称）を建設する予定である。すでに環境整備工事に着手しているが、これまでの調査成果を総合的に検討し、周辺の環境復元を含む集落構造の把握した上で、竪穴住居の復原候補の選定など、整備内容に反映させていきたい。

なお、16年10月23日に発生した新潟県中越地震によって、それ以降の遺物の整理作業が停滞してしまったが、平成18年度には新潟県の復興基金雇用対策事業を活用して作業を継続している。

参考文献

小熊博史　2000『馬高遺跡―史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う試掘調査概報―』長岡市教育委員会

小熊博史　2001『馬高・三十稲場遺跡―史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査概報―』長岡市教育委員会

小熊博史編　2002『馬高・三十稲場遺跡―史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告Ⅰ－＜遺構遺物概要編・自然科学分析編＞』長岡市教育委員会

長岡市教育委員会　2002『長岡市　史跡馬高・三十稲場遺跡環境整備事業基本計画書』

小熊博史　2003「遺跡速報：馬高遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』№510　ニュー・サイエンス社

長岡市教育委員会　2003『長岡市　史跡馬高・三十稲場遺跡環境整備事業基本設計書』

図16. 平成12・15・16年度 馬高遺跡の遺構平面全体図（部分、1/500）

報告書抄録

ふりがな	うまたか・さんじゅういなばいせき
書名	馬高・三十稲場遺跡
副書名	－史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査概報Ⅱ－
巻次数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小熊 博史（編著）
編集機関	長岡市教育委員会（長岡市立科学博物館）
所在地	〒940-0072　新潟県長岡市柳原町２番地１
発行年月日	2007年３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬高遺跡 三十稲場遺跡	新潟県長岡市関原町１丁目字中原2995他	15202	18 33	37°26′35″	138°46′22″	20030527～1117 20040720～1015	2,970 1,012	史跡の環境整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
(2003年度)	遺物包含地（集落跡）	縄文時代中期	竪穴住居跡・炉跡　25基 掘立柱建物跡３棟	縄文土器 コンテナ237箱 土製品・石器類108箱	・大規模な環状集落 ・火焔型土器の出土 ・掘立柱建物跡の検出
(2004年度)	遺物包含地（集落跡）	縄文時代中期	竪穴住居跡・炉跡　10基	縄文土器 コンテナ44箱 土製品・石器類41箱	・大規模な環状集落 ・住居群、墓域の検出

馬高・三十稲場遺跡－史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査概報Ⅱ

平成19年３月30日印刷・発行

発行：長岡市教育委員会（長岡市立科学博物館：新潟県長岡市柳原町２番地１）
印刷：㈱長井印刷所（新潟県長岡市泉２丁目２番２号）